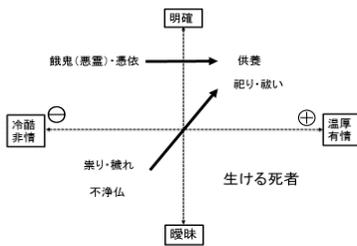


被災地の幽霊は社会学のテーマとなりうるのか

— 霊性と「シェア」をめぐる死者との対話

東北学院大学 金菱 清



生と死の境界性(縦軸)と死者への感情度(横軸)

1 目的

東日本大震災の被災地で幽霊の目撃談が相次いだ。通常社会学では生きた人間を対象とするので幽霊は即座に外される。その方が合理的だし説明しやすいからである。しかし、被災地の幽霊は死者と生者の邂逅の場として何を提供しうるのかという点から、本報告では社会学の根本問題を提示したい。

現実的に幽霊はいるかもしれないし、いないかもしれない。けれどもそれはどちらでもよい話で、当事者がそのように考えていることに寄り添って考えてみると、そこにどのような実践的な意味が込められているのか、ということを生者の死者との邂逅のあり方から見いだすことができる。

2 方法

東日本大震災の津波被災地で聞き取りをしていると、幽霊との邂逅が温かく迎えられている。このことは何を私たちに迫っているのだろうか？

たとえば、戦争や災害においては、大量死という現実を避けて通ることはできない。9・11テロや戦争など行方不明者について長らく調査した研究者であり、家族療法家でもあるポーリン・ボスは、「曖昧な喪失」という概念を用いて、死者がいてお葬式などの象徴的な儀礼によって送り出される遺族の「明確な喪失」と区別して、その状態が最終的か一時的か不明であるため、残された人びとは困惑し、問題解決に向かうことができない状態を定式化した。

また、幽霊を宗教論に近接させれば、私たちが通常接する死者との関係は、葬儀などの儀式では、死者を生者側が日常性（この世）から切り離し、非日常的領域（あの世）に移行させ、安定を図る行事である。このことを踏まえると、被災地で目撃される幽霊は、死後に肉体を離脱した霊魂であり、いまだ成仏し得ないためこの世に姿を現す存在（実体）であると宗教学者の一部は捉える。

ある宗教学者は次のように定式化させる。すなわち、「宗教の役割を東北地方の幽霊が安定化し、人びとを惑わすことがないようになるためにも、（1）不安定で迷っている死者たち、ねたみや恨みの感情を抱いている祟る死者、障る死者、成仏・往生できずに苦しんでいる死者から、（2）落ち着いて安定している死者たち、安らかな死者、成仏した死者、子孫を見守り援護する先祖、へと変化（ヘンゲ）することが求められる」と結論づけている。

救済システムとして捉えると、怨念を残した苦しむ死者の救済を、身内の死者への孝養と結びつけるという仏教の民衆への歴史的定着過程を主なベースとしていることになる。

3 結果

しかし、今回示す事例は、先祖供養でもなく、死者供養でもない。生者と死者のあいだに存在する曖昧な死は、マイナスの祟るような不安定な死ではない。再び現れたとしても温かく迎え入れる幽霊との邂逅は、当事者にとって自分のペースで一時預かりをできる生ける死者とのあり方を示している。

4 結論

今回の事例は曖昧な喪失の中身をむしろ温めて意味を豊富化させる方向に動き出している霊性（宗教的萌芽）とみる見方にたつ。そしてそのことが深いところで埋め込まれたシェアとして共有化されていると結論づけられる。